

# 伝統芸術に対する成年層の意識

— (特に茶道を通して) —

石川博美

## I. はじめに

日本においても、世界というひろがりのなかにおいても、茶の文化についての役割はあまりに大きく、いまさらながらこれらのことについてとりあげることはためられる様に思われる。しかし、私達がこれまでお茶についてははらってきた関心が、これは学門的関心やそれを取りまく一般の関心を含めて、その対象の大きさや、重要性に見あったものであったかどうかについては、疑問の余地を残さないわけにはいかない。

日本のなかだけを見ても、日常茶飯事のように茶というものも身のまわりについてまわっている。また、それが当然のようにも思っている。しかしながら、日本には、日本特有(独特)の伝統芸術としての茶道がある。

この茶道の歴史や心性については、多くの文献があり、研究もなされているが、伝統芸術あるいは伝統文化としての茶道がいかに庶民の生活の中に入りこんでいるか(溶けこんでいるのか。)という研究は少ない。すなわち一般の生活者が芸術あるいは文化としての茶道をどの様にとらえているのか、という意識の研究は少ないように思われる。そこで、生活者にとって茶道とはなんであるのか、生活と芸術あるいは文化がどのように結びついているのか、ということについて、とりあえず簡単な意識調査を行なった。また、茶道を学ぶことが日常生活にどのような役割をはたしているかについてもあわせて検討してみた。

## II. 対象と方法

### 1. 対象

本調査は、東京・埼玉の茶道経験のある成年男女60人を対象に記入式で行なった。

回収率：75% (東京, 29人, 埼玉, 21人, 新潟, 10人)

### 2. 調査対象の諸属性

性別：男, 4, 女, 56

年齢別：20代…23, 30代…11, 40代…11

50代…10, 60代…3,

職業別：学生…9, 公務員及び会社員…32,

主婦…15, 自営業…4

学歴：大学…20, 旧制高校・専門学校…6,

短大…14, 高校…19,

経験年数：1年以上～3年未満…20

3年〳～10年〳…23

10年〳…17

流派：表千家…45, 裏千家…9

宗偏流…6

### 3. 調査項目

調査にあたっては、①茶道を始めた動機、②茶道の経験年数、③茶道に費やす時間(これは1週間単位)、④茶道に対する意識、⑤どのようにして茶道の時間を作っているか。についての各項目である。(アンケート作成に当っては茶道経験のある人に、面接や予備テストを行なった。)

### 4. 整理方法

- 1). 動機については予備テストの結果を参考に、A(表-1の1～11), B, (表-1の12～19), C(表-1の20～22)の3分類に分け、それらと茶道に要する時間の関係を見た。また、茶道を始めた動機と経験年数とは、それぞれ相関するであろうという仮説のもとに検討した。
- 2). 茶道に対する意識と経験年数とは相関するであろうと思われるのでそれらについて検討した。
- 3). 茶道に対する意識については、茶道の特性や境地をあらわす言葉について判断を求めたものである。これら意識と動機についても関係があるように思われるので検討する。なお、その言葉を普段から使っているかどうかということについても問題にした。

## III. 結果

1. 動機については次のような単純集計結果が得られた。(5項目選択のため該当数は対象人数の5倍となっている。)

A分類は、茶道を行う動機としては比較的単純なものが多く、茶道をあこがれるものとして見ている傾向が強いもので、仮に単純動機と名づける。一般に該当数は

表-1 動機の項目別、大分類別該当頻数

動機	該当数	年 数			時 間			
		1年以上 ~3年未満	3年以上 ~10年未満	10年以上	3時間以下	3時間以上	2日以上	
A	1. 人に勧められた	12	6	5	1	11	3	4
	2. 親に勧められた	10	5	2	3	9	4	6
	3. 花嫁修業として	7	4	1	2	7	4	6
	4. 皆がやっているから	2	2	0	0	4	3	4
	5. ただ何となく	8	2	3	3	9	6	4
	6. 格好がいいから (お茶くらいしてないと)	2	0	2	0	3	2	0
	7. 格好がつかないから	2	1	1	0	2	2	2
	8. お菓子里に興味があるから	2	2	0	0	3	2	2
	9. お菓子里がおいしいから	6	5	1	0	6	1	3
	10. あこがれ	17	8	5	4	13	5	5
	11. 必要にせまられて	3	0	2	1	3	4	1
B	12. 気分転換のため	21	8	8	5	13	8	3
	13. 日本の伝統芸術だから	22	11	5	6	18	6	6
	14. 落ち着くから	32	9	11	12	17	11	9
	15. 生活の中に溶けこんでいるから	16	2	6	8	5	11	7
	16. 心がなごむから	37	8	15	14	17	14	7
	17. 静寂さにひかれて	28	5	13	15	10	12	6
	18. 幽玄さにひかれて	4	2	5	4	2	1	1
	19. みやびやかさにひかれて	2	1	4	3	2	0	0
C	20. 生涯教育の一環として	22	6	11	5	9	11	7
	21. 老後のため	11	1	5	5	8	3	4
	22. 将来教えるため	5	0	2	3	3	3	3
	23. 出世のため	0	0	0	0	0	0	0

あまり高くない。

B分類は、茶道本来の要素と精神的な面とがからんでいるので、仮に精神的動機と名づける。特に「心がなごむ」「落ち着く」「静寂さにひかれて」等を動機としたものが多かった。また、C分類においては、他のA、Bとは多少質が異なっており、茶道を自己教育の1つの手段として考えており、「生涯教育の一環として」という動機項目を選んだ者が多く見られた。これを仮に生涯教育思考とよぶ。

2. 動機と経験年数との関係については、表-1で示すように経験年数の長いほど、Aの単純動機が少なく、Bの精神的動機の方が多い。特に「落ち着くから」「静寂さにひかれて」「心がなごむ」などは経験年数の長い人に多く、茶道がいかに精神面での役割りを果しているかがわかる。また、経験年数と共に茶道を生涯教育の一環として考えている人が増えているのも見のがせない。

経験年数に関しては、経験年数が多いほど、茶道を行っている時間が多くなる傾向がみられた。

3. 茶道を行なう時間については、1週間単位で3時間以下の人が全体の58%であった。その他の人は5~10時

間という人が多くいたが、2日以上という人も9名もいた。

動機と茶道を行なう時間の関係については「生活の中に溶けこんでいる」「静寂さにひかれて」「心がなごむ」「落ち着く」という精神的動機を持っている人が、茶道に多くの時間をかける傾向が見られた。また、Cの生涯教育についても同様のことがいえる。

4. 茶道に対する意識については、表-2左端のような単純集計結果が得られた。

項目のほとんどすべてが、「心がなごむ」「わび」「さび」「奥深さ」などが多く、ついで「閑寂」「洗心」などが一般に高く評価されていた。しかし、「悟り」「優雅な遊び」が低いのは、それだけニュアンスが異なり茶道のイメージとしてびったりこない人が多いのであろうか、「どちらともいえない」と答えた人が多かった。

また、日頃使っている言葉や、聞きなれている言葉としては、「わび」「さび」が他の言葉に比べ多かった。ついで「心がなごむ」「一期一会」などが主であった。

茶道に対する意識と経験年数とについては、表-2右端に示すような結果が得られた。

表一 2 動機とイメージとの関係

(イメージについては全項目、動機については8以上のものを印してある。)

	平均値	日頃使っている率	動機 {注: *印は意識、動機項目該当者中、イメージにおいてプラス側を示したものが1/2以上、**は1/2以上、***は2/3以上}								経験年数 (実数)						
			人に勧められた	親に勧められた	ただ何となく	あこがれ	気分転換のため	日本の伝統芸術	落着くから	生活の中に溶ける	心がなごむから	静寂さにひかれて	生涯教育の一環として	老後のため	1~3以下	3~10以下	10年以上
わび	1.17	65														17	13
さび	1.05	62														16	14
数寄り	0.57	30														12	14
悟り	0.19	38														11	
精神修養	1.1	42				***									11	20	16
無の境地	0.7	35														14	12
和敬静寂	1.1	33				***									12	18	15
閑寂	1.13	27				***									13	18	14
自然との一体感	0.98	33				***									12	16	14
風流	1.04	43	***			**									18	13	10
優雅な遊び	0.13	20															
奥深さ	1.3	38				***									15	19	15
心をみがく	1.05	38				***									10	18	15
心がゆたかになる	1.18	37				**									12	17	16
心がなごむ	1.4	47				**									16	18	17
深い心	0.96	20				***									10	16	14
慎み深さ	1.05	28				***									11	18	12
温いおもいやり	0.98	40				***									11	15	14
敬う心	1.1	30				***									11	15	16
枯淡	0.7	17				***										15	13
一期一会	0.9	45				***										13	15
独座観念	0.3	13				***										14	12
直心の交わり	0.5	15				***										15	15
洗心	0.65	18				**										15	15
松風の音	1.02	37				**									10	18	16
釜の湯のたぎる音を聞くと心が澄む																	
お茶の香りによって気持が引きこまれる	0.76	13				**										16	15

茶道に対する意識は経験年数と共に高まる傾向が見られる。経験年数1~3年の人に「わび」や「さび」が余り感じられずに、それ以上の経験年数の人に年数と共にわび、さびに対する感覚意識が増加している傾向が見られるのはおもしろい。

5. 動機と意識との関係については表一2に示すような結果が得られた。

単純動機の人(とくに「あこがれ」に代表される)「心がなごむ」「風流」「心がゆたかになる」などのイメージを強調している。

精神的動機の人においては一般に、イメージとして

「精神修養」「和敬静寂」「心がなごむ」「松風の音」「敬う心」などのイメージが特に強調されていた。項目別においては、たとえば「心がなごむから」「静寂さにひかれて」という動機をもっている人が「悟り」を選択しているというような興味ある特徴が示されている。

最後に生涯教育を動機としている人は、イメージとしては「精神修養」「閑寂」「心がゆたかになる」等を多く示していた。

#### IV. 考察

茶道を始めた動機については、従来から言われている

女性のたしなみとか、花嫁修業としてというような意識がうすれてきており、精神的なものを求めている傾向が強く見られた。経験年数が増すにつれてこの傾向は強くなる。おそらく始めは単純な動機で茶道を始めた人も長く続けている間に、精神的なものを求めるようになるのであろう。現代のように変化の激しい世界において、ほんの数時間ではあるが、ある空間に「落ち着き」「ゆとり」「静けさ」など、精神的ゆとりを求めている姿がみとれる。戦国時代、武士の間に茶道が多く行なわれていた事に通じるものがあるのかも知れない。

また、各自が独立した人間として将来を考え行動していることが、多少なりともC分類の項で推定できるように思われる。

茶道にかかる時間については一般に3時間以下という答が多かったが、これは、現代の住宅事情やあわただしさ、せわしなさが反映しており、ゆっくりと家庭でお茶をたてるという行動に結びつかないのではないだろうか。本来はそれらのゆとりを持つことによって、日常生活へのゆとりなどが生まれ、現在問題になっている親子の断絶や、精神的ストレスなどの解消などにつながるのではないだろうかと思われる。

茶道に対する意識と動機全体についての結果は、一応

うなずけるものといえよう。経験が増すにつれて究道心のようなものも自然と備わってくるのであろう。それらを自然と身につけることが茶道の本質なのではないだろうか。茶道を自分の中に自然に受け入れ消化することが日本特有の伝統的精神、伝統的文化を維持し受け継ぐことになるのだと思われる。こうした心性（茶道に対する意識、イメージ）が、単に一部の特権的文化としてではなく、生活者の生活の中に溶けこんでおり、なじみ深いものになってきていることが若干でも裏付けられたことを嬉しく思う。

稿を終えるにあたり、ご助言、ご校閲いただきました、人間科学部・水島恵一教授、調査にご協力いただきました3地域の60人の方々に深謝いたします。

## 参考文献

- 1) 岡倉天心：茶の本，岩波文庫，(1929)
- 2) 数江江教一：わび，塙新書，(1973)
- 3) 態倉功夫：茶の湯，教育社，(1977)
- 4) 梅棹忠夫：茶の文化，淡交社，(1981)
- 5) 手銭白三郎：お茶のころ，河原書店，(1979)
- 6) 谷川徹三：茶の美学，淡交社，(1977)